

# ICT活用教育

ICT Conference in INA NISHIMINOWA  
小学校 6年 社会「明治の国づくりを進めた人々」

実践事例 NO.23

発行：伊那市教育委員会学校教育課  
編集：ICT活用教育推進センター

## 自分が老中だったら、1年後に開国（アメリカと貿易）するか？

### 学習の目標

ペリーの来航により開国（アメリカとの貿易）を迫られたことを学んだ子どもたちが、自分が老中であつたら1年後に開国をするか考える場面で、貿易の利益や危険性についてICTを活用しながら話し合うことを通して、日本が外国に侵略されないよう貿易の利害や戦争の脅威を考慮しながら条約を結んだことを知る。



①学習問題に関して、前時に書かれた友だちの意見を読んで気になるものに「いいね」を押してあります。学習問題を再度確認した後、気になる意見について直接友だちに聞きにいきました。あらかじめ意見が書かれていたことによって話し合いも深まっています。



②先生から新たな資料が提示されます。子どもたちは、アメリカの軍事力の強さに注目したり、アヘン戦争によって清が不平等条約を結ばれたことを資料から読み取ったりします。その中で、子どもたちの意見はしだいに揺さぶられていきました。



③スクールタクトには「揺れる気持ち」が書き込まれています。「共同閲覧モード」で友だちの意見が見られますので、さまざまな意見に触れることができます。考えが変わった子どもには「考えの変化と理由」を自覚させたいですね。あまり書けない子どもは友だちの考えを参考にして自分の考えを書き込むことができました。このことによって、そのような子どもの「学習への満足度」は変わってくるのです。



④本時のまとめと振り返りの場面です。子どもたちの意見もとに授業のまとめが行われていきました。指導者の先生方からは、「今までは先生が板書をして意見を整理していました。これからは、子供たちが整理するか、子どもたちがまとめるということを最終的に目指せるといいと思います。」というお話もありました。学びの主体を子どもたちにしていく必要があるからです。

信州大学 佐藤和紀先生による授業の見所の解説

### 「見方・考え方を支えるICT活用」からみた授業の見所

「見どころ」としてまず注目したいのは、学習問題が「老中だった」という答えのない問いになっている点です。これに対するアプローチを子どもたち自身がしていくということです。この目標が大変いいと思います。

学習目標を達成目標と向上目標に分けて考えます。ここでの達成目標（ゴールのある目標）は、「江戸幕府の仕組みを理解すること」「江戸時代から明治時代の過渡期の背景を説明できる」ことです。

この目標を達成しつつ「自分が老中だったらどうするか？」ということ子どもたちが考えていくわけです。この授業の中で、ICTは2つの働きをしています。

まず、「自分が老中だったら」を子どもたちが考えるためには、社会的な見方・考え方を働かせていくための工夫が必要になります。そのためにクラウドの活用が行われます。もう一つは活動の効率化です。効率化することによって「振り返り」に時間を確保することが可能になるでしょう。

### 公開授業研究会での議論の様子から

#### 【研究会テーマ1】授業者の願いに沿ったICT活用であったか

- ・授業者の願である「言語活動の充実をはかりたい」から考えると、グループでの意見交流の場面で、iPadを利用したことは有効だった。児童の中には、言葉にして説明することが難しかったり、字を正しく丁寧に書くことが難しかったりして意見交流がなかなかできない子もいることからよかったと思う。
- ・手元にカラーで拡大も自由にできる資料があったことが効果的であったと感じた。

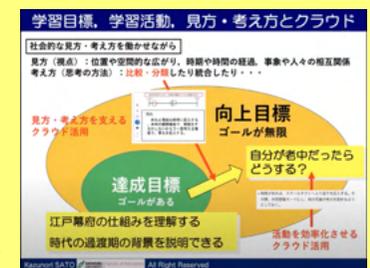
#### 【研究会テーマ2】あの場面で、ICTをこのように使ったらもっと有効だったろう。」というアイディア

- ・授業の中で考えが変わった児童の意見を発表していたがスクールタクトで全員の意見の変化を確認してから発言するようにすると、全員が同じ視点に立てたのではないのでしょうか。比較することによって前と後の変化がよくわかったと思う。
- ・前時までにスクールタクトに書き込んだ意見に対して、お互いにコメントをつけておくことによって、事前に考えることもでき、導入の時の意見交換がより焦点化され、深まったのではないかと感じました。といった意見が出されていました。

### 研究会の中での 佐藤和紀先生のお話の中から

#### 宮川先生の授業について

宮川先生の授業からいろいろなることを学ばせていただきました。子どもたちへの関わりであるとか、先生の言葉には無駄がないなど、いろいろなところできちんとされていました。「開国するかしないか・その理由」を書く場面で、「事実と意見」と書いた方がよかったのではと感じました。それは、情報活用能力という観点でみたとき根拠はどこにあるかは情報社会の中では大変重要な意味を持ちます。ですから「事実を読み解く」その上での「意見」を書くという構成でもいいのだと考えます。情報の扱いや情報を批判的に読み解くという力が育てられていきます。情報を批判的に読み解く力をつけないと「情報モラル教育」には結びついていきません。日常的に授業の中では情報を取り扱う場面はあるので、ぜひ意識していただくと良いでしょう。授業の中で十分に言語活動をさせていたことは非常に良いと感じました。さらに、文字入力による言語活動を充実させてほしいと思います。



西箕輪小学校 6年 宮川美穂 先生の公開授業と東北大学 堀田龍也先生、信州大学 佐藤和紀先生、参加された先生方のお話をもとに推進センターで編集させていただきました。

堀田龍也氏による講演『これからの学校が取り組むべき研究とは』は「伊那市教育チャンネル」(YouTube)で配信しています。

